

岩屋地区の「いなか市」を活かしたむらおこし

奈良県山辺郡山添村岩屋「風の会・青葉」

代表 山本 一夫、広報担当 ○奥谷 和夫

1. 方針・目的

山添村岩屋地区は、同村内で最も大きな集落でありながら、高齢化が進み、耕作放棄地の広がりなど農地の荒廃がすすんでいる。しかし、地域では、その現状を変えようとする壮年層がおり、「風の会・青葉」を結成。地域資源を活かし、「いなか市」のとりくみなど、周辺都市住民との交流を通じて、地域の再生・活性化をはかろうとしている。

2. 内容

2009年春から農地環境整備事業の導入に際して、耕作放棄地の解消や地域活性化に向けて会合を重ねてきた。同年12月に「第1回岩屋いなか市」を開催、続いて2010年6月に「第2回岩屋いなか市&ホテル鑑賞の夕べ」、11月の「第3回岩屋いなか市」を開催し、近隣の三重県名張市など都市住民との交流をはかってきた。この「いなか市」のとりくみを通して、これまで捨てられていた地域の農産物が、高齢者をはじめとした地域の兼業農家の臨時収入となっている。

3. 他の活動団体の参考となる事例

住んでいる人にとっては見えにくいですが、その地域には磨けば光る資源が数多く存在している。岩屋地区は縄文時代や古墳時代、奈良時代の遺跡があり、棚田風景、里山風景が残り、清冽な河川があり、夏にはホテルが飛び交う。こうした地域資源を見出し、それを活かしながら「いなか市」という形で、農産物や自然の恵みをお金に変えていくコミュニティビジネスにつなげている。都市に隣接した農山村という、おかれている条件や可能性を最大限に活かしているとりくみは、他地域での「まちづくり」や「むらおこし」のとりくみに展望をひらくものと考えられる。また、こうした活動を通して、地域に住む人たちが地域に誇りを感じるとともに、未来への展望をつかみ、地域も住んでいる人も元気になる、そういった事例である。

都市の住民にとっても、安心して安全な農産物の供給地を確保するとともに、身近な故郷を思い起こさせる「いなか」を持ち、都市と農村の交流と共同の新しい事例でもある。

4. 今後の課題等

単発のイベントの繰り返しとなっており、毎月など、定期的・継続的なとりくみが求められる。

中心になっているメンバーは、非農家のボランティアであり、農業生産者が自らのとりくみとして、主体的に参加するという点が弱い。

広報活動の不足等により、都市に近い農山村や地域資源を十分活かしきれていない。

第6回「関西元気な地域づくり発表会」

奈良県山辺郡山添村岩屋地区

岩屋地区の「いななか市」を 活かしたむらおこし



風の会・青葉 奥谷和夫

岩屋「風の会・青葉」は

- 農地環境整備事業のなかで
→耕作放棄地の増加を解消
- 地域では、少子、高齢化の進行
- 隣村のむらおこしのとりくみに刺激を受ける
- 地域の条件を活かして
- 壮年層を中心に2009年春
に「風の会・青葉」を結成

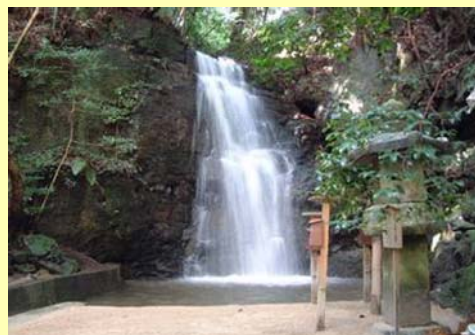


岩屋地区はどんな地域か①

- 縄文や奈良時代の遺跡
- 自然、景観にすぐれている
- 山添村で一番大きい集落
- 名張市や大阪に近い
- 近くに巨大な団地
車で10分以内の距離
- 東豊小学校が廃校に



岩屋地区はどんな地域か②



第1回「岩屋いななか市」の開催



回を重ねた「岩屋いななか市」と出張販売



09年～10年にかけてのとりくみ

- 09年12月「第1回岩屋いなか市」約300人参加
- 10年6月「第2回岩屋いなか市&ホテル鑑賞の夕べ」約200人参加
- 10年11月「第3回岩屋いなか市」約300人参加
- 10年12月「岩屋いなか市」出張販売200人参加

成果と今後の課題

- 経済的なメリットとともに、生きがい、地域への誇りをつちかう→1回当たり10万円以上の売り上げ
- 周辺都市住民からも歓迎
- 単発的なイベント→継続的なものに
- 農業者の積極的参加が少ない→売れるが売るものがない、少ない
- 可能性を活かしきれていない→食品加工所、農家レストラン、農村民泊